

サルヴァトーレ・フェラガモと歩む
足元の世界



意図

「サルヴァトーレ・フェラガモと歩む、足元の世界展」とは、靴業界の一端を担い、靴文化の発展を大きく押し進めた1人であるサルヴァトーレ・フェラガモの人生を追いながら、世界の靴文化の変遷の紹介を通して、靴の内面的な魅力を知ってもらおうと共に、靴を一造形作品として触れてもらうことを目的とした企画展である。

靴は、人間の生活を支える「衣」の一部として、時代が求める機能・造形・材質に適応しながら、一文化として発展を遂げてきた。しかし、近年は「自分の推しが履いていたから買う」「このブランドだから買う」「SNSで話題になっていたから買う」など、ブランド力や話題性に富んだ靴の売買に重きがおかれ、多くの消費者が靴の文化的・歴史的背景を含む靴本来の内面的な魅力に特段気を配ることが少ないと感じる。

また、スターの靴職人とも呼ばれたサルヴァトーレ・フェラガモは素材、伝統、文化などさまざまな面から靴を見つめ、彼の圧倒的な想像力と驚くほど繊細で美しい造形力、天才的な技術を活かし、靴という日常生活に溶け込みすぎているが故に蔑ろにされやすいものを、アートの世界へと導いてきた。

当企画展ではスターの靴職人である、彼が産んだ靴という造形作品にフォーカスすることによって靴の内面的な魅力を知ってもらい、靴を一造形作品として触れてもらう第一歩となってほしいという思いから、この企画展の立案に至った。

内容

会場：jing

東京都渋谷区神宮前6丁目35番6号

期間：2025年3月20日～3月30日

対象：靴に対して少しでも関心のある女性

会場に設定したのは、原宿駅から徒歩2分の商業施設「jing」だ。この施設は、日本と世界を繋ぐ“文化の交差点”がコンセプトとなっており、まさに当企画展に適した場であると言えるのではないかな。また、当施設はJR原宿駅に隣接し、東京メトロ明治神宮前駅にも直結しているという好立地であるためアクセスがしやすく、多くの来場者を見込める。加えて、施設の側面には大きなビジョンが設置されており、映像を用いた広報と共に世界観を作り出すことができる。

開催期間は来場者が訪れやすい春休みであるに加え、新生活に向け新たな靴への関心が高まり意識が向く3月を予定している。

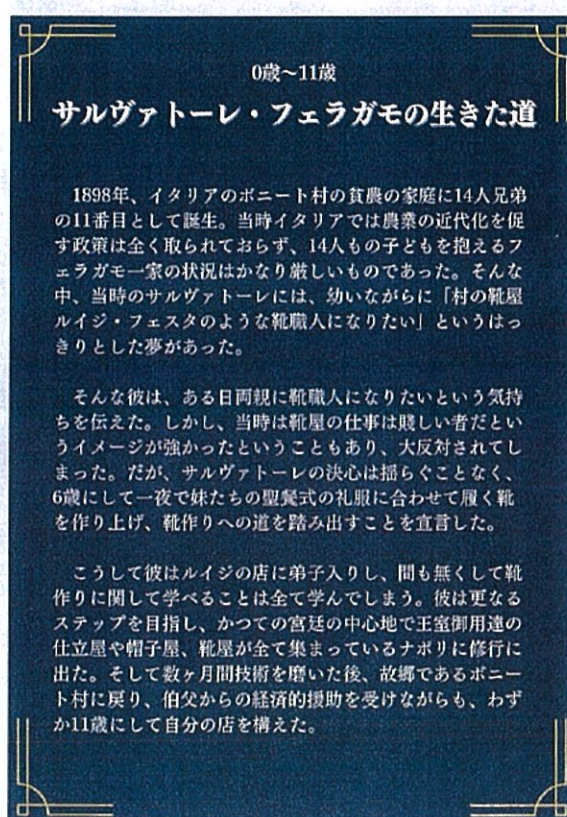
さらに、多くの人に靴を一造形作品として触れてもらうための第一歩として、まずは靴に少しでも関心のある者に靴の内面的な魅力を伝えていく。また、サルヴァトーレ・フェラガモは主に女性の靴を生み出してきたため、女性に焦点を絞ることで、より魅力が伝わるのではないかと考えた。

展示内容

- ① スターの靴職人、サルヴァトーレ・フェラガモ
- ② サルヴァトーレ・フェラガモと世界の靴文化の変遷
- ③ 触れて感じる、サルヴァトーレ・フェラガモの世界
- ④ 自身の思う、靴の魅力

① スターの靴職人、サルヴァトーレ・フェラガモ

スターの靴職人とも呼ばれる、靴文化の発展に大きく貢献したサルヴァトーレ・フェラガモが生きた道を年齢で分けた展示ボードを用いて紹介し、彼の靴に対する思いや誠意を知ることができる。さらに、彼にまつわる様々な写真を展示することで、サルヴァトーレ・フェラガモという存在をより身近に感じることができる。



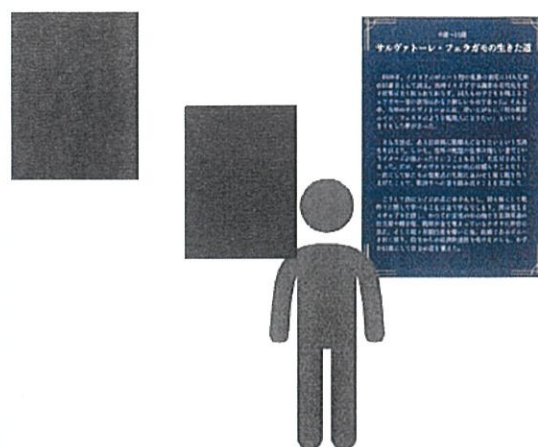
展示ボードイメージ



展示写真イメージ (サルヴァトーレ・フェラガモ)



展示写真イメージ (イタリアボニート村)



展示イメージ

② サルヴァトーレ・フェラガモと世界の靴文化の変遷

サルヴァトーレ・フェラガモという人物を理解した後、彼の生み出した靴という造形作品やその説明を実際に展示し、自身の目で見ることによって写真だけでは伝わりきれない作品の魅力を、より理解する。さらに、その時代の歴史的背景となる、靴文化の変遷を展示ボードを用いて紹介することで、靴の文化的・歴史的背景を含む内面的な魅力を知ることができる。

靴文化の変遷

靴は、気候や地形などから足を守る以上の役割や意味付けを与えられてきた。古代ローマでは、奴隷たちは裸足であったが、市民はサンダルなどを自由に履いていた。また、西洋では、ガラスの靴が登場するおとぎ話など、靴が重要な役割を担うものが多い。しかし、長い間履き物や女性の靴のファッションは変化が乏しいものであった。なぜなら、足の先まですっかり隠れてしまうほどの丈の衣服に靴は隠されていたため、靴はスタイルを決める要素にはならなかったからである。

この状態は20世紀前半まで続いたが、その後第一次世界大戦を境に徹底的に覆された。以前は男性が担っていた仕事を女性が肩代わりしなければならなくなり、動きにくい長い丈の衣服は当時の素早く、効率よく仕事をこなすには不向きであり、より実用的な服装へと発展していった。

このようにして実用的ではないものは省かれ、衣服の丈が短くなったことにより、足に注目が移るようになった。そのため、靴の重要性が高まり、戦時下の耐乏生活の反動も重なり、デザインや素材の組み合わせなどの足元の装飾が急激に多様化した。

展示ボードイメージ



展示作品イメージ (Invisible sandal 1947)



展示作品イメージ (Sandal 1938)



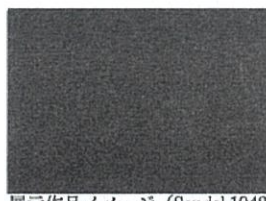
展示作品イメージ (Court shoe 1958-59)



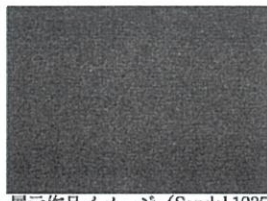
展示作品イメージ (Court shoe 1927)



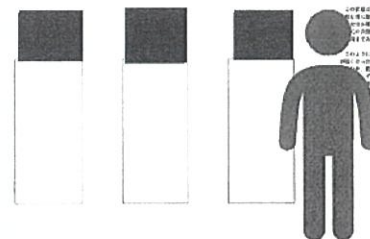
展示作品イメージ (Sandal 1938)



展示作品イメージ (Sandal 1942-44)



展示作品イメージ (Sandal 1935-36)



展示イメージ

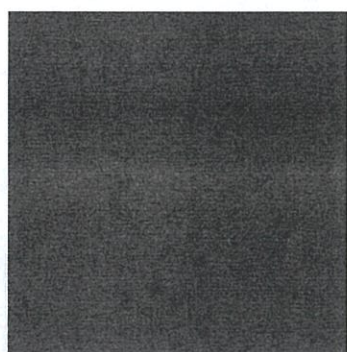
靴文化の発展

靴は、気候や地形などから足を守る以上の役割や意味付けを与えられてきた。古代ローマでは、奴隷たちは裸足であったが、市民はサンダルなどを自由に履いていた。また、西洋では、ガラスの靴が登場するおとぎ話など、靴が重要な役割を担うものが多い。しかし、長い間履き物や女性の靴のファッションは変化が乏しいものであった。なぜなら、足の先まですっかり隠れてしまうほどの丈の衣服に靴は隠されていたため、靴はスタイルを決める要素にはならなかったからである。

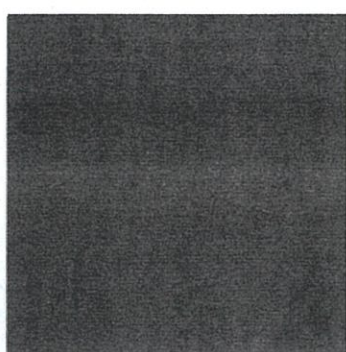
この状態は20世紀前半まで続いたが、その後第一次世界大戦を境に徹底的に覆された。以前は男性が担っていた仕事を女性が肩代わりしなければならなくなり、動きにくい長い丈の衣服は当時の素早く、効率よく仕事をこなすには不向きであり、より実用的な服装へと発展していった。

③ 触れて感じる、サルヴァトーレ・フェラガモの世界

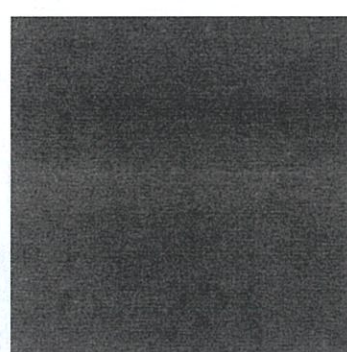
実作品からの視覚的な刺激を受けた上で、次はサルヴァトーレ・フェラガモの大きな特色であり、大切にしていた靴を構成する「素材」に実際に触れ、匂うことで、彼の作品の多様さや魅力をより深く理解する。また、ソファを設置し、ここで自身の履いている靴にも触れてもらい、素材から受ける刺激を楽しんでもらうと共に、自身の靴へ意識を向け、理解を深める。



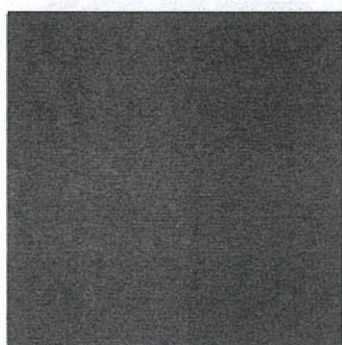
展示作品イメージ（スエード）



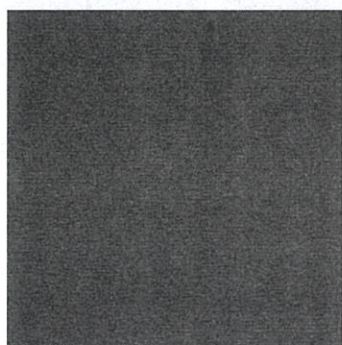
展示作品イメージ（木材）



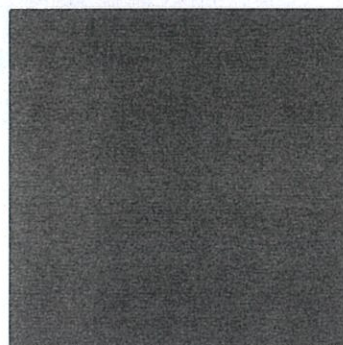
展示作品イメージ（コルク）



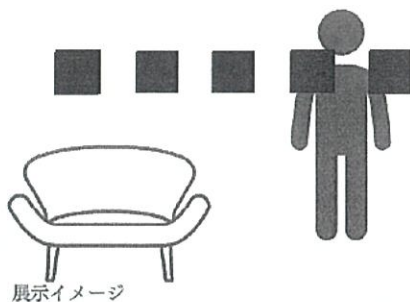
展示作品イメージ（ワニ革）



展示作品イメージ（サテン）



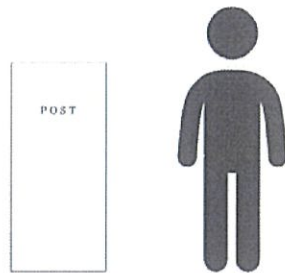
展示作品イメージ（オーストリッチ革）



展示イメージ

④ 自身の思う、靴の魅力

靴の内面的な魅力を知った上で、この企画展を通して感じた自分なりの靴本来の魅力の解釈や新たな気付き、靴に対する考え方の変化やサルヴァトーレ・フェラガモへのメッセージなどを文字に綴り、設置されているポストに投函する。このような行いをすることによって、自然と自身の履いている靴の本来の魅力へ意識が向くと共に、知識や思考のアウトプットとなる。



設置ポストイメージ

～ まとめ ～

本企画展を通して、サルヴァトーレ・フェラガモ自身の魅力や彼の生み出した靴という造形作品としての魅力や多様さ、さらにはその裏に隠された、文化的・歴史的背景を含む靴の内面的な魅力の発見に繋がったのではないだろうか。これらの発見から、自身の履いている靴の本来の魅力に意識を向けてもらい、日常に隠れた一造形作品として今後触れてもらうことができれば幸いだ。

参考資料・書籍

- ・貧農から“スターの靴職人”へ 「フェラガモ」創業者の生涯をたどる
- ・スターの靴職人サルヴァトーレ・フェラガモが遺したスタイル
- ・靴の歴史～ヒールの変遷から～：市田京子
- ・『サルヴァトーレ・フェラガモの華麗なる靴』ステファニア・リッチ
- ・『13歳からのアート思考』末永幸歩
- ・『なぜ人はアートを楽しむように進化したのか』アンジャン・チャタジー